2006．9．25

No.１４１

編集　樋口　みな子

E-mail
minginga@agate.plala.or.jp
郵便振替
「銀河通信」
02740－7－56535
（６号分1,000円）

野幌から秋の便りです。

今年の夏は北海道も厳しい暑さでした。皆さんはいかがお過ごしでしたか？地球の温暖化が進んでいるのでしょうか？北海道の高山植物の植生にも変化があったのではと心配です。

私は毎週のように山に登っていました。家族は、私の行動力にあきれながら、土日の山を認めてくれているようです。特に印象的だったのが３０年ぶりに登った日高の幌尻岳です。山腹に３つものカールを抱え、スプーンでえぐったような襞が美しく、熊が今にでも出てきそうな原始の森が目の前に迫り圧倒されました。

先日は、大雪の紅葉を見に愛山渓温泉から沼の平に登りました。日本庭園のような沼に愛別岳や安足間岳が見渡せ、紅葉した広葉樹林が素晴らしかったです。

以前は本を読んでいることが多かった私が、かつての面影などどこにやらたくましく？！変身しました。

我が家の庭のナナカマドの実が赤く色づき、青空にとても映えます。静かに過ごせるいい季節。しばらくご無沙汰していた読書や、映画鑑賞、絵画展にも出かけてみたいと思っています。

小樽赤岩から見た日本海　９月２３日

紅葉の大雪・沼の平　９月２４日

快晴のウペペサンケ山

９月２日、３日

支部の東大雪の山行は２つの班に分かれて行われました。
９月２日、札幌、函館、旭川、帯広と各地から、それぞれ車に乗り合わせ糠平温泉キャンプ場に４時に集合。道東ブロックの会員が中心になり、２０人近い会員、会友の食材を準備してくださり、焼肉が豪快で美味しかったです。
分水嶺踏査以来の再会に、時を忘れて話しに花が咲きました。道東ブロックで用意してくださったテントは広々として快適でした。
３日４時起床。手早く朝食を済ませ、沢詰めから丸山に登山する班と、ウペペサンケ山に登山する班に分かれての山行です。

ウペペサンケ山(糠平コース)　本峰　1,848m
ＣＬ長谷川雄助　ＳＬ助田陽一　朝日守　三戸部清文　神埜和之　佐藤守　横川政行
樋口みな子　武田一生　　会友　三宅昂　今田美知子

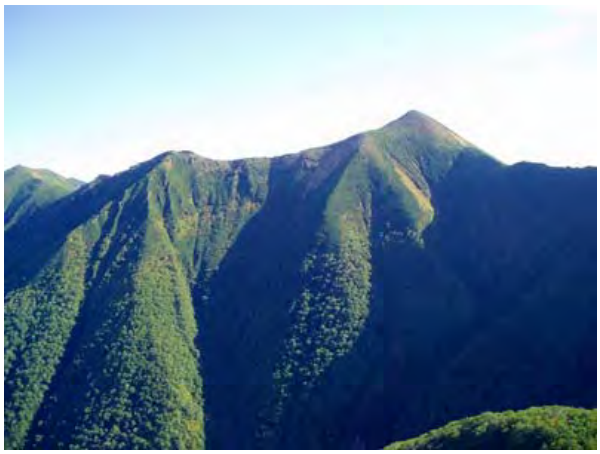
9月3日は全道一斉山のトイレデーと称し、各地の登山口で山のトイレマップの配布、登山者への啓発などを行っています。今年はテッシュは持ち帰ろうと、マナー袋を配布しました。
登山口を５時５０分に出発。雲ひとつない快晴の中を元気に進むが暗い針葉樹林帯を過ぎたところで、最終水場の湧き水にホッと一息です。台風による倒木で、登山道はふさがれて、大木に短い足を乗っけたり、くぐったりを何度も繰り返し、心臓やぶりの急斜面にとりつきました。誰ひとりとして「休みたい」とか「つらい」とか言う者もなく、黙々と歩いていく姿に、分水嶺踏査を思い出しました。
１３９９ｍに着いたのは、出発から１時間１５分でした。何度もウペペに登っている長谷川Ｌや助田サブから、「ここまでが一番つらい登りだよ」といわれて安堵したのは私だけだったでしょうか？

１３９９ｍピークで、一気に展望が開けますが、ダケカンバと、笹に覆われた尾根道をかきわけながら進みます。１６１０ｍピークまでのわずか２１０ｍの高度差の稜線がなんと遠いことか。最大の山場です。１６１０ｍピークからは伸びやかで雄大なウペペサンケが見渡せ、稜線を渡る風が心地いい。コケモモの赤が鮮やかで青い空に映えてました。花の種類は少ないですが、ウメバチソウやウサギギクが彩をそえ、イワギキョウが可憐でした。
青い空にぽっかり浮かんだ雲、眼下に糠平湖、３つ並んだラクダの背中のような溶岩円頂丘が特異な景観で、心なごみました。糠平富士からさらに西に進み、やせ尾根と厳しいアップダウンを経て本峰まで足を延ばしました。

ウペペサンケから見る鋭く堂々としたニペソツが印象的。背後にトムラウシ、表大雪のたくさんのピークが見え、３６０度の大パノラマに感激いっぱいでした。互いに写真を撮りあい、絶景をおかずにランチも楽しかったです。
登り返しや、急斜面の下山は、足を痛めないように慎重に進み登山口に１５：４０に辿り着き長い登山を終えました。（みな子）

コースタイム　登山口　５：５０　１３９９ｍピーク　７：１５　１６１０ｍピーク　８：１５　菅野温泉分岐　８：４５　（休憩３０分）　出発　９：１７　糠平富士　９：５０　最高地点（１８４８ｍ）１０：３０　ランチタイム　１１：３５　糠平富士　１２：１５　１６１０ｍ　１２：５０　分岐　１３：０６　１３９９ｍ　１４：０８　登山口　１５：４０

幌尻岳清掃と幌尻山荘排泄物汲み取り登山に参加して　9.16～18



日高山脈ファンクラブの高橋健さん（日本山岳会会員）の呼びかけで　幌尻岳清掃と幌尻山荘排泄物汲み下ろしに９月１６日から１８日の３日間参加しました。同じ山岳会の長谷川雄助さん、自然児学校に参加した榊原いづみさんも浦河から参加。１３人で清掃と汲み下ろしをしました。

１６日はヌカビラ川取水ダムまで車で入り、一斗缶と食料を１３人全員で背負い幌尻山荘まで１５～６回の渡渉をして到着しました。沢は減水していて渡渉は楽でした。

１７日は、沢班と夏道班に分かれて、清掃しながらの登山です。夏道班は私も含めて８人です。始めからの急斜面のつらい登りが２時間近くも続き、命の水でやっとほっとしました。汲み取りの排泄物を背負うための７０リットルのザックが重かったです。

命の泉付近は、テッシュがあちこちにあり、マナーを守って欲しいなと思いました。飲み干したペットボトルもあり、持っていくのがどれほど重いの？と言いたくなります。それ以外のごみは少なかったです。毎年の清掃登山が効を奏してしるのでしょう。

ご褒美は、３０年ぶりに登った幌尻岳からの日高の全山を見渡せる素晴らしい眺望でした。登った甲斐がありました。しばし、山座同定に花が咲き、カールが美しい原始あふれる日高の山々を堪能しました。

まだまだ清掃は続きます。幌尻の肩から七つ沼カールが見下ろせ、カールの底を清掃をしている沢班とエールを送りあい、連帯感が嬉しい。

清掃しながら幌尻岳へ

戸蔦別岳への縦走は、痩せ尾根をジグをきって進みます。ホシガラス、シマリス、アカゲラが冬を前に忙しくえさをついばむ姿も見ました。そのたびに元気づけられ歩を進めました。ナキウサギの声もたくさん聴きました。鋭くそびえる戸蔦別岳山頂に着きホッとするのは甘かったです。

戸蔦別岳からの六の沢出合までの下りは、行けども行けども急斜面。ゆっくり足を痛めないように注意を払って糠平川に向かって下山です。六の沢出合に降りて数回の渡渉で、山荘着。

幌尻岳から見た戸蔦別岳

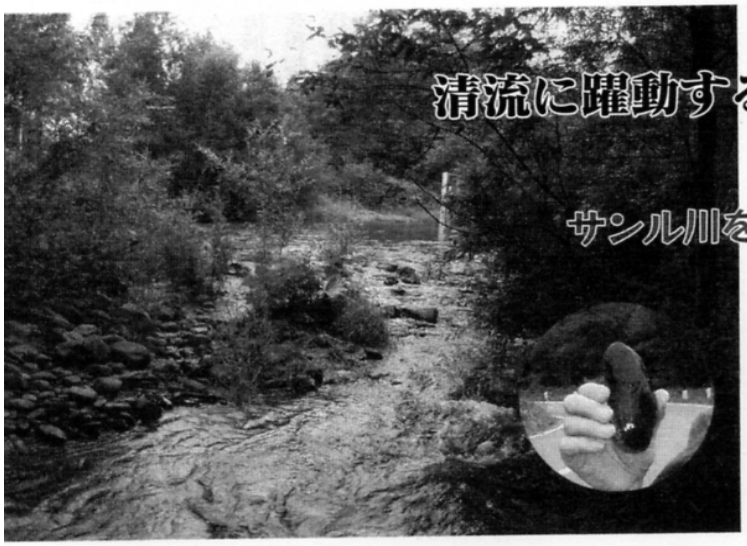
一足早く着いていた榊原さんが、カレーを作って待っていたのに感激でした。

１８日は３日間の最大の目的、山荘の排泄物の汲み取りです。４００Kgのものを一斗缶にあらかじめビニール袋を入れしっかりと蓋をする作業。長谷川さんは手際よくビニール袋の口を閉め、女性陣は缶の蓋をして、さらにビニールの袋に入れます。一斗缶１０個、丸缶８個を担ぎ下ろします。私も丸缶１個４kgを背負いました。ザックの重さは１４．５kgになりました。達成感いっぱいで、下山はザックは重いのに、心は軽かったです。

今年の秋には、長年の運動が実り山荘横にバイオトイレが 設置されます。大事に使いたいものです。

初参加の汲み取り、貴重な体験をさせてもらいました。（みな子）

2006年9月21日　北海道民医連新聞



サクラマスが産卵していた淵。円内はカワシンジュガイ

清流に躍動するサクラマス

カワシンジュガイも生息

サンル川をダムから守ろう

9月10日、サンル川のサクラマスの産卵の観察会があり、札幌や、函館、旭川など各地から53人が参加しました。サクラマスは、私たちにびっくりしたのか、なかなか姿を現してくれませんでしたが、ついに、柳の下の緩やかな流れの淵で砂を掘っている、ピンクが美しいメスの産卵をみることが出来ました。いのちの躍動に感動しました。

カワシンジュガイも初めて見せていただきました。カワシンジュガイはアイヌ語でビバ。河川環境の指標生物として注目される絶滅危惧種です。カワシンジュガイの幼生はサケ科魚類の幼魚のエラに寄生しなければ生きていけません。

この美しい清流にダムを造る計画が進められています。ダムがつくられたらサクラマスが遡上できなくなくなり、ビバもすめなくなるのです。

美しい清流は北海道の財産です。無駄なダムはいらないと大きな声にしていきたいですね。

（樋口みな子）

大沢から不風死岳　8.20

小雨にも関わらず、私もこれで5回目の沢体験で、大沢出合から不風死岳に登りました。メンバーはｇａｎさんをリーダーに６人です。

しばらくは暗くて、岩がゴロゴロした枯れ沢がつづきましたが、やがて川のせせらぎが聴こえはじめ、ホッっとします。でもワイルドで急斜面の登りはさらに続きます。３０ｍもある崖から流れ落ちる大滝は圧巻。雨で周りが水墨画のような幽玄さを醸しだしていました。最大の難所は、立ちはだかる岩をどうやってよじ登るのかという場面。ｇａｎさんがザイルで確保してくれ、ハラハラドキドキしながら、登り終えたときはホッとしました。

大滝、小滝と短いながらも沢の醍醐味も充分に味わいました。

何千年もの歴史をかけて、１０ｍはあろうかと思われるところから岩を削り、優しい曲線から流れる幅１ｍのスダレ状の滝に心洗われました。

メンバーは足並みも良く、早いペースで息も切らさず登っていきます。私も、先週、発寒川での訓練の成果で、足を踏み外すことなくリズミカル？に歩くことが出来満足しました。

沢そのものの美しさよりも、野趣たっぷりの変化に富んだコースが面白かったし、頭も体も使って、尾根に辿り着く探検を楽しませてもらいました。

沢を離れると花火のようなウドの花が、大歓迎してくれました。私の苦手な藪こぎはほんの少し。尾根に辿り着いたのは11時10分。出発から4時間40分でした。

頂上からの雨で眺望はなく、９合目まで降りて風のあたらない場所をみつけて、Ａさんのツェルトを張り、ランチタイム。ワカメや、揚げ入りのラーメンが美味しい。冷え切った体に熱いラーメンがしみわたり、幸せに満たされました。（みな子）

本 Books

「海からの贈りもの」

アン・モロウ・リンドバーグ著
落合恵子訳　学研　１４００円

本書は、海と浜辺、そして島を巡る思いについて書かれた本です。著者は、チャールズ・リンドバーグと結婚して以来、夫と共に世界初の北大西洋の横断調査旅行に携わった女性です。

・・・わたしたちは結局、みな孤独である。ひとりでいるということを、もう一度はじめから学びなおさなくてはならない。・・・この世にたったひとつのものなど存在しない。あるのは、たったひとつの瞬間だけだ。・・・どれだけ多くではなくて、どれだけ少ないもので暮らすか。・・・中年は、ほんとうに自分自身でいられる年代なおかもしれない。等、ひとつひとつのタイトルが、詩のようにすっと心の中に入っていきます。

退職したばかりの頃、仕事をしていない自分が、社会から取り残されたような寂しさを覚えました。忙しいことが充実しているかのような錯覚をしていたのです。著者は、忙しい暮らしの中でもひとりになって過ごす時間の大切さを語っています。「人間から離れていると、ほかの動物に親近感を抱くようになる。地上と、海と、空の美しさ。そういったものが以前より大きな意味を持ち、それらとわたしは一体になる。」という風に。

山に登っているときは、生きていることを実感できるのに何もない一日が、物足りないと感じることがしばしばでした。この本は、自分を豊かにするひとりの時間の大切さを思い出させてくれました。こんこんと湧き出る自分の泉を見出せたらと思います。

「憲法九条を世界遺産に」

太田光・中沢新一著　集英社新書　660円

爆笑問題のお笑い芸人として活躍している太田光さんが、思想家の中沢新一さんと真面目に憲法を論じています。

宮沢賢治の作品は好きだけど、賢治が傾倒して行った田中智学の政治思想とどう結びつくんだろうという割り切れなさとどう向き合うのかという、新たな視点が新鮮です。賢治の研究者は誰も触れてこなかったと思います。

憲法九条があったから、過去60年間、日本人は平和に守られてきました。あたりまえのようだけど、それはすごいことなんだと改めて思いました。アメリカ人が作ったのだから、改正しようという人たちがいます。でも、作られた経緯は、理想社会の具現を目指したアメリカ人と、敗戦からようやく立ち上がり二度と戦争を起こすまいと固く決意した日本人との、奇跡の合作というべきものだったという。だから反対勢力があったとしても、今の憲法であり続けることが大事なんだと二人は主張します。太田さんはこうも言います。「世界遺産としてなぜわざわざ作るのかといえば、自分たちの愚かさを知るためだと思うんです。ひよっとすると、戦争やテロで、大事なものを壊してしまうかもしれない。そんな自分たち人間の愚かさみ対する疑いがないとこの発想は出てきません。愚かな人間だからこそ守っていかなければならない世界遺産なんです。」と語っています。また中沢さんは「日本国憲法は、ことばでできた日本人のドリームタイムなんですね。このことばでできたドリームタイムによって、日本人は今まで精神の方向づけを行ってこられたんです。」と語っています。

二人のことばのキャッチボールがよくかみ合って、そ、そんな見方もあったのかと、目からうろこでした。ユニークな憲法九条を守り抜きたいとの思いが多くの人たちに広がって欲しいです。

赤岩で岩登りの練習

9月２３日、山メーリングリストの仲間であるａｄａｃｈｉさん、神野さん、フェルさんから、クライミングの基礎を教えてもらいました。

怪我をせずに安全に登山するには、基本は身につけておかなくてはと常々考えていました。小樽赤岩の素晴らしいロケーション、青い海を背に、青い空に向かって登るクライミングに夢中になる人たちの気持ちが理解できました。

卵岩で、スタンスとホールドを見つけて、何度も登ったり、下りたいの訓練をしました。その後、奥リスで確保してもらいながら、１５メートルの壁をよじ登りました。下をみたら、卒倒しそう！でした。写真は、へっぴり腰の私です。「もっと岩から体を離せ！」と指導を受けました。

懸垂下降も、最初の一歩が足がすくんで「ぽんと足を乗せて！」と言われても、踏み外したらどうしようと躊躇しました。

「一回やれたらいいや」としり込みしてたら、神野さんから「懸垂下降をしっかりマスターして」　と励まされて、３度挑戦しました。怖さが薄らぎました。

ａｄａｃｈｉさんからは、岩を歩く時も、次に足をあげる岩を考えてリズミカルにとアドバイスいただきました。

短い時間でしたが、とても勉強になりました。

自然児学校にスタッフとして参加

日本山岳会の恒例の行事、自然児学校が8月3日（木）から6日（日）まで新冠町の松本会員の広い所有地をキャンプ場として開催。今年は7回目。私もスタッフとして4日間子どもたちと一緒に山登りや川遊びを楽しみました。

参加したのは13人の子どもたちと、子どものお母さん、スタッフ24人です。初日は開校式後テント張り、キャンプファイヤーの点火式。オリエンテーションと続きます。

2日目は、篠山登山。帰ってきてから、新冠川にかかる車が通行しない人道橋から、懸垂下降の練習。初めての子どもは、大騒ぎしながらも、最後までやり遂げるのに感心しました。

3日目は、浦河町の乳呑川に、沢靴に履き替えて出発。アンモナイトなどの化石が出るというので、私も子どもたちと一緒に夢中になって探しました。5つも６つも化石をみつけた子どもたち。目が輝いていました。

最後の夜は、バーベキュー、花火大会。焚き火を囲んで、盛りだくさんの一日を振り返りました。

傘貝の化石を見つけました。

4日目はツリークライミング、パン焼きで大忙し。子供たちが自由に遊ぶ時間がもっとあっても良かったかな。

参加者全員の食材をそろえるのも、大変だったと思います。初めて参加のスタッフは気苦労したことでしょう。私もかって「大雪と石狩の自然を守る会」のグリーンフォーラムにスタッフとして参加したことを思い出しました。

子どもたちから、自然を愛するリーダーが育っていったらいいなと思います

購読料をありがとうございます。８．５～９．１６

菊池和美(札幌市）古田寛昭（所沢市）芳賀孝郎・淳子（千葉市）三浦恵美子（旭川市）渡辺亜貴子（福島市）相馬淑子（江別市）泉加澄（札幌市）
カンパも含めての方　富沢克禮（小平市）5000円　　17,000円は印刷、送料に使わせていただきます。
ありがとうございます。

アフリカでエイズと闘う

AIDS孤児と未亡人を支援

「北海道赤いリボンアフリカ支援の会」を設立

国連食糧農業機関（FAO）東南部アフリカ地域事務局　土地保有・地方制度担当官　泉　かおりさん

東南部アフリカでHIV／AIDSが猛威を振るっています。国連食糧農業機関（FAO）東南部アフリカ地域事務局（ジンバブエ＝ハラレ）で土地保有・地方制度担当官としてこの問題に取り組んでいる札幌出身の泉かおりさんに聞きました。（樋口みな子）

国連職員として東南部アフリカ21カ国の土地問題を担当しています。これらの国々は世界でも最悪のHIVの打撃を受けている地域です。

アフリカ東南部の明らかな特徴の一つは、社会的経済的不平等です。それは単に金持ちと貧乏人との間の不平等というだけではありません。女性や子どもが土地・財産の所有や相続で弱い立場に立たされる伝統的な社会システムのなかで、夫や父親に先立たれた妻や遺児が親戚などに土地を横領され、生活を営めなくなる事例が相次いでいるのです。貧困に突き落とされた女性や少女たちは、性的搾取や暴力に一層さらされ、HIV感染の拡大に拍車をかけています。

AIDS患者の3分の2がサハラ以南アフリカに居住しています。世界のAIDS患者は4千万人弱ですから、いかに多いか想像できると思います。

ジンバブエでは昨年、政府が首都ハラレを中心にスラム街の家屋の取り壊しを強行し、約70万人が家を失いました。その中には夫に捨てられ、障害児を抱えている女性も数多くいます。家を壊され、外で出産した母親は18歳の孤児でした。医療設備が悪く重度の脳性マヒがとても多いのも現実です。国民の80％が失業者で、家屋を取り壊された被害者の中には地面に穴を掘り、モグラのように寝ている人もいます。

ウガンダのHIV／AIDSの女性活動家は、自分の子どもにAIDSであることを伝えられなかったのですが、ソーシャルワーカーと知り合って、メモリーブックを作り始めました。親が死ぬ前に子どもたちの心の準備をするためです。

AIDS孤児たちと話しをすると「大人になったらAIDSで苦しんでいる人を助ける仕事をしたい」とか「学費の支援や一緒に暮す人が欲しい」「AIDSにならないか妹や弟が心配」などと語ります。望みが慎ましく、胸が痛みます。

厳しい現実の中で、自立を目指し立ち上がっている女性たちもいます。彼女らは手作りした買い物袋やテーブルセンター、子どもを表す青と、AIDSを表す赤のコンビのビーズのバッジなどを販売し、苦境から抜け出ようとしています。8月にカナダのトロントで開かれた国際AIDS会議で、彼女らのグループは援助団体や援助国が草の根団体への直接支援を増加するように呼びかけました。1日1家族につき66トン分のサプリメントの食糧援助が実現されればエイズ患者が健康に生き延びられるというマラウイからの実証研究も報告されました。マイクロソフトのビル・ゲイツがAIDSの予防と治療に関する医学研究費に多額の寄付をしましたが、私たちがかかわるAIDS孤児やAIDSの重荷の大半を担う女性たちへの支援には、まだまだ十分な資金援助がされていないのが現実です。

国連としてのかかわりには限界があります。昨年夏に帰国した時に、友人、知人に声をかけ、AIDS孤児と未亡人たちを支援する「北海道赤いリボンアフリカ支援の会」を立ち上げました。自立を目指す女性らの手作り作品を販売し、彼女らの生活支援をしたいと思ってのことですが、まだまだ支援者が足りないのが悩みです。支援グループと横のつながりを持ち、障害を持つ母親たちのためにHIVに対する知識の啓蒙も広げたいし、彼らが安心して暮らせるシェルターも作りたい。切実なのは中古でいいから車椅子が欲しいですね。AIDS孤児たちに教育も受けさせたい。

◇

12月21日から1週間、道新文化センターの後援で赤いリボン創立1周年記念の写真展を予定しています。問い合わせは「赤いリボンアフリカ支援の会」加藤静恵☎011（562）2921

いずみ・かおり＝国連食糧農業機関（FAO）職員。1957年生まれ。学生時代も含めてアフリカに関わって30年。仕事や活動を家事などでバックアップする夫はノルウェー人。18歳、16歳、9歳の2女1男の母

映画

「春が来れば」　　韓国　監督　リュ・ジャンハ

トランペットを吹く中年の主人公は、交響楽団で活躍する夢をなかば捨て、斜陽の炭鉱町に移り住みます。中学の吹奏楽部の先生として。子どもたちの家庭は貧しい意。けれど演奏したいという気持ちに応えるかのように、チェ・ミンシクの気持ちも変化して行きます。

イギリス映画の「ブラス」の設定と似ているなと思いましたが、生徒たちがコンクールで、堂々と力強く演奏するシーンが素敵です。音楽はお金では買えない生きる喜びを与えてくれます。やけっぱちでさえなかったチェ・ミンスクが、生徒たちの輝きを見て、もう一度夢を取り戻すのです。

ロマンチックな恋があるのでもなく、むしろ韓国映画にしては地味な映画ですが、しみじみと余韻が残る映画でした。蛇足ですが、昔つきあっていた恋人との愛の復活を予感させるラストも良かったです。

お便り

■先日１６日、ｋさんと夕張へ向かう車中は、最近のみな子さんの分水嶺に始まって沢の活動などの話題であっという間に夕張に着きました。女性パワーは全国の山域を席巻してますね。グループ展は何かの用事の余禄でご来場ください、と言っては私以外の出展者に失礼だ。私の作品を出汁に、素朴ですばらしい木版画の作品の数々を鑑賞する時間を作ってください。（札幌市　かわ健さん）

河村さんとその仲間の20周年ＧＥＭ木版画展が、10月１６日～21日まで札幌時計台ギャラリー3階全室（中央区北1条にし3丁目）で開かれます。是非観てください。（み）

■「げんき」５００号になりました。「蟻の兵隊」見てきました素晴らしい映画です。札幌の上映もあるようです。インターネットで調べてください。（水海道市 Ｍ．Ｔさん）

■お勧めの大平山へ行ってきました。藪もあり、露にびしょぬれになりましたが、花の種類が多く、時期は少し過ぎたようでしたが見ごろのものもあり、特にウスユキソウは最盛期でよかったです。

滝の瀬十三丁は、極楽浄土への道筋のようにも思えるすばらしいところでした。大雪の浄水の瀬音を聞き、その煌き、飛沫を浴び、ヒタヒタと歩いていると、心が洗われ、夢のようでした。（加賀市ｏ．ｙさん　ｏ，ｔさん）

■銀河通信18年もの長い間続けてこられたこと、感心してしまいます。私も読売新聞の夕刊にコラムを6月から書いています。月1回で来年の5月までの予定です。短い文章ですが最近はプレッシャーを感じています。来月は「北海道中央分水嶺踏査記録」刊行記念祝賀会がありますね。お会いできるのを楽しみにしています。（札幌市 Ｋ．Ｋさん）

■相変わらず頑張っていますね。銀河通信も１４０号を迎えましたか、１５０号、２００号と頑張ってください。私も年数回だけれどもそこいらの山に登ってますが、私が企画して会（労山百松山岳会）で、年１回海外トレッキングに行ってます。今年は、ピレネー山脈トレッキングに１２名で行ってきました。花もたくさん咲いてました。（札幌市　Ｋ．Ｈさん）

幌尻岳にて　９月１７日

８月１９日、長沼町の絵本の店「ぽこぺん」で、加藤多一の絵本「ホシコ　星をもつ馬」の挿絵の原画展を見てきました。